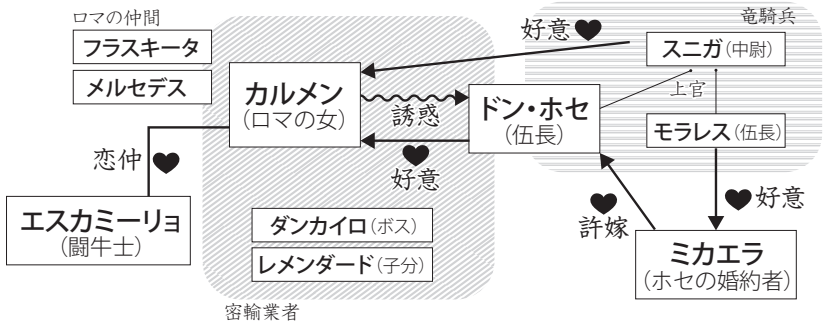


楽曲紹介

解説=堀内 修

ビゼー (1838 - 1875) 歌劇『カルメン』



カルメンの物語

セビリャのタバコ工場で働いていたカルメンは、同僚とケンカして捕らえられる。だが見張り役の伍長ホセを巧みに誘惑して脱出し、自由を得た。営倉を出たホセを迎え、恋仲になったはいいが、ホセが上官ともめごとを起こし、2人は一緒に密輸団に加わった。ホセの婚約者が取り戻しに来た時、気持ちが闘牛士エスカミーリョに移っていたカルメンは、引き留めたりしなかった。セビリャの闘牛場の前で、よりを戻そうと迫るホセを拒んだカルメンは、刺殺された。

ドン・ホセの物語

竜騎兵の伍長ドン・ホセは任地のセビリャで一人の女の見張りを命令された。ケンカ騒ぎで捕まったその女がカルメンだった。カルメンに誘惑され、ホセは縄をほどいて逃亡を許す。おかげで営倉に入ったが、出てきた後でカルメンと

深い仲になるのだった。密輸の仲間に加わったが、カルメンとはうまくいかない。婚約者ミカエラが山中にやってきたので故郷に戻ったものの、カルメンが忘れられない。セビリャの闘牛場の前で待ち伏せ、復縁を迫ったが拒まれ、逆上して刺殺した。

『カルメン』の音楽と物語

〔前奏曲〕 簡潔だがオペラ全体を端的に表現している。活力にあふれる「闘牛士の歌」も、暗い死のテーマも、ここで聴こえる。

〔第1幕〕セビリャのタバコ工場の前の広場 兵隊たちが広場にゆきかう人々を眺めているところに、婚約者のホセを訪ねてミカエラがやってきた。ホセに交替の後で会えると知ったミカエラは、出直すことにした。

兵士の交替が始まる。ホセも来た。子供たちが真似して行進している。

鐘が鳴って、タバコ工場から働く女たちがタバコを吸いながら出てきた。だがその中にカルメンはいない。

皆に注目されながらカルメンが現れ、私は自由が好きと歌う(ハバネラ)と、手にした花をそこにいたホセに投げる。

カルメンたちが工場に戻った後、ミカエラがやってきてホセと再会する。「母さんの話を聞かせてくれ」とホセが頼み、2人は親密に語り合う。

ミカエラが戻り、ホセがさっきの花を捨てようとした時騒動が起った。工場での争いの張本人がカルメンだった。カルメンは捕まり、ホセが見張り役を命じられる。

見張り役のホセを、カルメンは「リーリヤス・パステアの酒場に行こう」と誘いかける(セギディーリヤ)。ホセはとうとう縄をほどき、カルメンの逃走を助けてしまった。

〔第2幕〕セビリャの城壁近くのリーリヤス・パステアの酒場 酒場にカルメンや仲間の男女が集まって騒いでいる(ロマの歌)。

やってきたのは花形闘牛士のエスカミーリョだ。乞われるまま「皆さんに乾杯!」と歌う(闘牛士の歌)。闘牛士が目付けたのはカルメンだ。

皆が去った後、ダンカイロとレメンダードは女たちを密輸の仕事に誘う。さらに

カルメンが一人になったところへ、歌いながら(アルカラの竜騎兵) 営倉を出たホセがやってくる。カルメンは歓待するが、帰営のラッパで気もそぞろになったホセに怒り出す。ホセは大事に持っていた花を取り出し「おまえが投げたこの花は」と歌って(花の歌)、必死にすぎる。

でも戻らなければ、とホセが決めた時、ホセの上官スニガがやってきた。カルメンをめぐるスニガと争ったホセは、結局密輸の仲間に加わるはめになった。

【第3幕第1場】山の中 密輸業者たちが暗い山中で一休みしている。カルメンと仲間のメルセデス、フラスキータの3人が「混ぜて、切って」とカード占いをしているが、カルメンに出るのは暗い死の札ばかり。

一方ミカエラがホセを連れ戻しに、一人で暗い山中にやってきた。「何もこわくない」とアリアを歌って自分を勇気づける。

ミカエラがホセを見つけた時、もう一人の男が現れる。カルメンを訪ねてきたエスカミーリョだ。ホセと争いになるが、一同に止められ、エスカミーリョは皆を闘牛に招き、去っていく。そこでミカエラが見つかった。懇願にもかかわらず居残ろうとしたホセだったが、母が病気と聞き、ミカエラと去った。

【第3幕第2場】セビリャの闘牛場の前 大勢の人々でにぎわっている広場で、行進曲が始まり、闘牛士たちが入場していく。歓声とお祭り気分は、カルメンを連れたエスカミーリョの登場で頂点に達する。フラスキータとメルセデスが、ホセが来ていると、カルメンに教えるが、恐れる様子はない。

人々が入場した後、ホセがカルメンに近づいた。死を告げる管弦楽は、カルメンがホセにもらった指輪を投げたところで暗く響く。あくまで拒むカルメンを、ホセは刺す。俺が殺した! の叫びで全曲が終わる。

『カルメン』の誕生と現在

パリのオペラ・コミック座から新作を依頼されたジョルジュ・ビゼー(1838-1875)は、プロスペル・メリメ(1803-1870)が1845年に発表した小説『カルメン』を選ぶ。台本を書いたのは親しい友人のアレヴィとメイヤックだった。

オペラ・コミック座は市民のための「上品な」劇場だった。原作をそのままオペ

2/19

2/21

2/23

ラ化するのはいずれ。カルメンは悪女から働く女になり、無法者は削除されと変更が加えられた。これが『カルメン』をフランス・オペラの傑作どころか、時を超えたオペラの名作にするのに役立つとは、作者たちも想像できなかったのではないだろうか。

1875年3月3日、『カルメン』はオペラ・コミック座で初演された。和らげられたとはいえ、『カルメン』は問題作だった。主人公はケンカも誘惑も逃亡もするロマの女で、舞台を密輸入たちが歩き回り、殺人事件で終わる。初演は成功しなかった。『カルメン』の進撃はパリでなくウィーンから始まる。ウィーンでの上演に際し、歌とせりふから成るオペラ・コミックから、歌をレチタティーヴォでつなぐグランド・オペラに変えることになったが、その作業の途中でビゼーは急死してしまう。30代の若い死だった。仕事を引き継いだギローがグランド・オペラ版を完成させ、『カルメン』は1875年の5月にウィーン宮廷歌劇場で上演された。これが成功し、『カルメン』は現在まで続く人気オペラになっていった。今日『カルメン』はオペラ・コミック版とグランド・オペラ版の両方で上演される。

時とともに『カルメン』は変わる。男をたぶらかす悪女の典型だったカルメンは、自由を求める女として肯定的に描かれるようになる。アリアは第3幕でミカエラが歌う一つだけで、基本は歌いかける相手が舞台にいる歌、という構成は、現代のドラマ性を重視する上演にぴったり。19世紀も21世紀も変わらないのは気持ち動かす歌と音楽だ。ハバネラ、セギディーリヤなど舞曲を元にした音楽で、『カルメン』は聴く者をかきたてる。

[原作] プロスペル・メリメ『カルメン』 [台本] ルドヴィク・アレヴィ、アンリ・メイヤック
 [作曲年代] 1872～1874年 [初演] 1875年3月3日 オペラ・コミック座にて
 [楽器編成] フルート2 (1番、2番ともピッコロ持ち替え)、オーボエ2 (2番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、コルネット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(カスタネット、タンブリン、小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル)、ハーブ、弦楽5部

ほりうち・おさむ(音楽評論家)／東京生まれ。1970年代からオペラとクラシック音楽に関する執筆活動を行い、雑誌や新聞に寄稿するほか、テレビやFM放送にも出演してきた。著書に『オペラ入門』(講談社)、『モーツァルト・オペラのすべて』『ワーグナーのすべて』(平凡社)などがある。